

令和6年度入学試験問題（前期日程）

小 論 文

中等教育教員養成課程

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には、かならず受験番号を記入すること。

〔問〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

私たちをとりかこむ世界は、実にカラフルだ。俗に七色とか虹色とかいう、光のスペクトルに沿って赤から緑をへて紫へと並ぶ色彩のバリエーションは、ほとんどすべて、身のまわりのありきたりの人工物に見つけることができる。

バリエーションは、色彩だけではない。私たちは、視覚によって色彩以外の質感や輝きを、さらには聴覚による音、嗅覚による匂い、味覚による味など、さまざまな知覚でバリエーションを享受している。音楽でいえば民族音楽からハードロックまで、生活音でいえばテレビの音から飛行機の爆音まで、各種の音の洪水の中で翻弄されるがごとくだし、一年 365 日、毎日ちがった味の晩御飯のメニューを楽しむことだってさほど困難ではない。

ただし、私たちがこのようにバラエティに富んだ各種の知覚を享受するようになったのは、さほど古いことではないと思われる。たとえば、私がいまこの文字をつづっているパソコンの画面の形や色や質感を、百年前の人^が体験できていたとは思えない。このパソコンのキーをまちがえたときに鳴る電子音も、百年前の人には無縁だっただろう。キッチンからただよってくるコーヒーの匂いや洗面所の石鹸^{けん}の香りも、ありふれたものになったのはどれくらい前のことだろうか。歯みがき粉の味も、相当に新しい時代のものにちがいない。

このように、色や形、質感や輝き、音、匂い、味などのバリエーションは、現代にむかって時代が進むにつれて多彩になってきた。これらのバラエティの一つ一つを「知覚できるもの」という意味で「知覚資源」と呼ぶと、人類の歴史は、知覚資源の多彩化と多量化の歩みだということも可能だ。知覚を通じて心を動かす力を広い意味での美とする本論のとらえ方からすれば、知覚資源は美の源泉ともよびかえられる。人類史は、このような美の源泉を生み出し、革新する歩みだったともいえる。

重要なのは、これらの知覚資源がかもし出す美の多くが、経済的価値や人間関係を演出し、社会を複雑に組織化していくのに役立てられたことである。たとえば金^{きん}は、その独特の色彩、質感、輝きが、稀少^{きう}さともあいまって、歴史のかなり早い段階から地球上の各地で価値あるものと認識され、それを持つたり見せたりすることが、社会的な立場や権威のありかをしめすのに役立てられてきた。

金のように稀少な物質ならまだしも、ある色彩を用いることが社会的に限定され、制約を受ける場合さえあった。中国・北京の紫禁城のいらかを彩る濃い黄色は、皇帝の權威の象徴だといわれる。また、自分以外がピンク色で装うことを禁じたという18世紀のロシア女帝エリザヴェートの逸話なども、どこまでが真実かは別にしても、権力による色彩の利用の端的な例として思い浮かぶ。

エリザヴェート女帝の逸話ほど極端でなくとも、特定の色で特定の地位や階層をあらわす制度は、歴史上たびたび登場している。日本古代朝廷の「冠位十二階」で、紫を最高位とするランクづけの色表示がおこなわれたことは、その典型例だ。現代でも、たとえば大相撲の行司の位階が、立行司の紫または紫と白、三役格の朱、幕内格の紅白といった具合に装束の房の色であらわされている例をはじめ、伝統文化の慣習などのなかにその名残を見つけることはたやすい。

いっぽう、このような区分けとはちょうど反対に、色はまた、それを共有することによって人びとを一つにまとめる心理的手段としても、しばしば利用されてきた。黄色の頭巾を結束の目印にしたといわれる中国古代後漢末の内乱・黄巾の乱は、事実だとすればそのような例になるだろう。現代でも、サッカーの国際試合で日本チームが身にまとう「サムライ・ブルー」は、スタンドのサポーターのみならず、画面を通じて声援を送る人びとにも共有され、誇示されて、一体となった高揚感を演出する手段となっている。私も、まっ黄色に染まった甲子園球場のスタンドでは大興奮状態だ。

色にくらべると、音や匂いや味は、一つ一つに色のような分類名称をつけて特定することがむずかしく、なおかつ、その場かぎりで消え去っていく知覚であるために、企図して社会的に利用される機会は多くない。社会的な区分けにこれらの知覚資源を用いたり、制度化したりすることはむずかしかっただろう。

ただし、音についていえば、その音波を運ぶ空気につながっている人びとには、色以上にいやおうなく一様にそれを共有させることができる。視覚は、姿勢や視線によってある程度は取捨選択できるが、聴覚はそれがむずかしい分、強制性が高いといえるのである。そのことを活かし、一体的な高揚感をかもし出す有効な手段として、儀礼や宗教の場で、音はさかんに利用されてきた。寺院や教会の鐘、読経や聖歌の合唱の声などが、その場の雰囲気をごれほどに盛り上げるかを思い浮かべてみれば、音と

いう知覚資源を利用する効果のほどが容易にうかがわれる。

そういう意味では、匂いもまた同様の特性をもっている。しかも匂いは、ヒトがパートナーを選ぶときにも潜在的な役割を演じているという説があるほど、言葉にされることのない暗黙裡のレベルで、私たち人間も含めた生物の営みの本源と深くむすびついた知覚だ。生まれ育った場所に久しぶりに帰ったときの懐かしさの感情が、匂いによって強烈に刺激される体験などは、匂いという知覚のもつこのような性質をよく物語っている。身分や階層の区分けには不向きだが、懐かしさの感情と結びついた帰属意識などを深く呼びおこす知覚資源として、匂いもまた人類社会の歴史のなかで大きな役割を果たしてきたと考えられる。

出典：松木武彦 『美の考古学 古代人は何に魅せられてきたか』 新潮社，2016年，
pp. 129-132

(設問の都合により本文の一部を改変している。)

(問1) 筆者は「知覚資源」をどのようなものであると述べているか。70字以上100字以内で答えなさい。

(問2) 色や質感、音、匂いなどの「知覚」や「知覚資源」に関連して、中学校や高等学校でどのような教育実践や生徒指導に取り組む必要があるのか、自己の考えを300字以上400字以内で述べなさい。